

待降節第三主日 喜びの主日

2014. 12. 14

第一朗読 イザヤ 61・1-2、10-11

第二朗読 テサロニケ第一 5・16-24

福音朗読 ヨハネ 1・6-8、19-28

クラレチアン宣教会 長崎壮助祭

今日は待降節に入り三回目の日曜日を迎えました。待降節になると司祭、助祭は準備や節制などを思い起こさせる紫色のストラをつけます。確かに待降節は、目を覚まして主の到来を待ち望むことを求められる期間でもありますが、待降節中、第三主日は「喜びの主日」とも呼ばれ、この日だけはバラ色のストラをつけてもいいことになっています。今日は「喜びながら待つ」という待降節の意味を考えてみたいと思います。

第一朗読ではイザヤ書が読まれました。

「貧しい人に良い知らせを伝えるために。打ち砕かれた心を包み
捕らわれ人には自由を つながれている人には解放を告知させるために。
主が恵みをお与えになる年 わたしたちの神が報復される日を告知して
嘆いている人々を慰めるために」(イザヤ 61 章 1-2 節)

この言葉は、宣教の始めにイエスが生まれ育ったナザレの会堂で朗読した箇所です。イエス様は、このイザヤの言葉が、自分の宣教において実現することを予見していました。今はやりの言葉でいうと、イエス様のマニフェストとも言えるでしょう。

福音書はイエス様が町や村を残らず回って、会堂で教え、神の国の福音を宣べ伝え、奇跡を行い、ありとあらゆる病気や患いを癒されたことを伝えていきます。奇跡は見捨てられた人々に対する神の国の救いの力を示す明らかな「しるし」として考えることができるでしょう。

しかし、同時にイエス様は群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた」(マタイ 9・35-36) ことも伝えていきます。なかでも貧しい人や病気の人、罪人たちの打ちひしがれた状況は、イエ

ス様の心を傷つけていました。

イエス様が自らの宣教の本質とし、最優先にされたことが、貧しい人々に福音を告げることと、彼らと友情を結び連帯することだったのです。

イエス様の貧しい人々との連帯は、福音書にたびたび現われる宴会あるいは食事の場面を通して描かれます。特に罪人や除け者にされた人たちとの宴会や食事は、イエス様が終末の使者であることへのしるしでした。

イエス様がいかに貧しい人との連帯を大切にされたかは、山上の説教にも表れます。

「貧しい人々は幸いである、神の国はあなたがたのものである」(ルカ 6・20)と、貧しい人たちを幸いな人の一番目に置きました。彼らの貧しさに打ちひしがれた状況は、イエス様によって格別に祝福されました。貧しい人とは、経済的に貧しい人だけではなく、病気で苦しむ人、社会の片隅に追いやられ、孤独のなかで人生を送っていた人、つまりこの世で頼るものがなく、神様にしか頼るものがないと思っていた人たちです。わたしたちの周りを見渡した時に、今、最も助けを必要としている人がいると思います。そのような人たちを指してイエス様は「貧しい人は幸い」と言ったのです。

では、なぜイエス様は「貧しい人々は幸いである」と言ったのでしょうか。イエス様が言う「幸い」の意味は、貧しい人々は今苦しんでいる代わりに、天国において報いを受けられる希望があるので、貧しさを受け入れなさい」ということではありません。

貧しい人々の幸いとは、むしろ「時は満ち、神の国は近づいた」(マルコ 1・15)という、神の国の始まったことに基づいているのです。

つまり、「人々が人間らしく生きることを妨害する罪や悪の支配が終わりを告げ、彼らの期待を超える正義の国がきましたよ」ということです。彼らは幸いです。なぜなら神の国の到来は、人間がお互いを尊重し合う世界を造り出し、彼らの貧しさに終止符を打つからです。

二千年前に起こったあのナザレでのイエス様の第一回目の到来は、正義が行われる新しい世界の到来を告げ知らせました。

そしてその国は、やがて来るべきイエス様の第二の到来によって完成をもたらします。この救いの完成の時を希望のうちに喜んで待ち望むことが、待降節のもう一つの意味なのです。

今日の第二朗読で、パウロは「喜びなさい」とテサロニケの信徒を励まします。喜びというのは人が神の前にあってとるべき大切な態度です。福音書のな

かで、天の国の話が出てくると決まって、神様は「わたしとともに喜べ」と仰られます。

また、今日の答唱詩編では『詩編』のかわりに、ルカ福音書のマリアの賛歌が歌われました。人間的に考えれば、マリア様も不安で一杯だったはずですが。なにしろ、まだ年端もいかない少女であったのに、救い主を産むという偉大な使命を任せられたのですから、はじめは尻込みしたことでしょう。しかし、マリア様は神様の救いの業の実現を確信して「この身になりますように」と答えられました。

そして、マリア様の返事のお蔭で、わたしたちは、イエス様を通して神の子としての身分をいただくことが出来たのです。マリア様は自分が崇められることよりも神様の救いの道具となることで喜びました。わたしたちもマリア様に倣い、マリア様と心をひとつにして、救い主の降誕を待ち望みましょう。

これからミサは感謝の典礼、イエス様とともにテーブルを囲む食卓へと移ります。二千年前、イエス様と食卓を囲んだ人たちと同様、イエス様はわたしたちに沢山の恵みを注いでくださるでしょう。